

～ 口蹄疫の現場から ～

宮崎の口蹄疫防疫活動に参加して

(株)サンエスブリーディング 名越 仁 宣

昨年5月、宮崎での惨状を報道で見るとつれ、自分も何か役に立つことが出来ないかとの思いに駆られていました。

県に連絡すると、民間への要請は無いだろうとのこと。

JASV（日本養豚開業獣医師協会）に尋ねてみたら、6月4日にはJASVのメンバーも全員引き上げる予定とのことでした。

しかし、6月10日にワクチン接種区域外の宮崎市、西都市に飛び火したことにより、JASVから派遣要請があり、6月16日から10日間現地で活動することとなりました。

活動内容は、ただひたすら豚の殺処分。

私が参加した頃は、電殺、薬殺、ガス殺と方法も確立されていたので戸惑いはありませんでしたが、当初は試行錯誤した点もあり苦労されたことと思います。

初日に、農場内でただ殺されていく豚を見て、哀れに思い胸が痛くなりましたが、それも2日目まで、3日目からは‘すっかり慣れて’ただ目の前の豚を殺し特に感慨もない自分に対して‘妙な罪悪感’を感じていました。

私の派遣先はすべて川南町でした。

作業終了後は、現地にて下着も含めてすべて着替え新しいタイベックを着用して川南町役場へ帰

ります。役場に到着後は、サンダルおよび手指の消毒、口腔内をイソジンでうがいした後、すぐにシャワーを浴び全身をよく洗った後、新しい衣服に着替えホテルへと帰ります。

以上が私が派遣された川南町役場における防疫体制ですが、人づてに聞いたところ、新富町役場にはシャワー設備が無かったそうです。

ゆえに、作業後役場に戻り、簡単に消毒し衣服を交換しただけでバスに乗り、各々ホテルへと帰ったそうです。

移動の際は“消毒ポイント”なる場所にて車両を入念に消毒します。ホテルから川南町役場までに3箇所、役場から現地までに1～2箇所あり、待機している数人の人の手により丁寧に消毒されていました。それだからこそ、余計に新富町役場にシャワー設備が無いことが疑問に思われました。

特例として避難させたスーパー種雄牛の件とともに、大きな問題だと思えます。

今、当時のことを振り返ると、あの10日間はあまりに非日常で、まさに夢だったのかと思われま

す。これからも現実には成らず“夢のまま”であることを願っています。